

やはり比企谷八幡は捻  
くれている。続

秋乃樹涼悟

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

総武高校を卒業して専門学校に通いだした一色いろは。ひとりで立ち寄った喫茶店クレマで比企谷八幡と再び出会い、ふたりの関係がまた動き出した。

# 目次

- エスプレッソは嫉妬と失恋と恋の味に似  
ている。 | 1
- 女子はどうしてか恋話が好きである。 | 10
- 一色いろはの友達が可愛いのは間違っ  
てはいない。 | 18
- 雨に濡れた黒猫を比企谷八幡は放つてお  
けない。 | 31
- 鶴見留美にもそんな想いがある。 | 42
- 比企谷八幡はひと手間をかける。 | 54



エスプレッソは嫉妬と失恋と恋の味に似ている。

「なあ一色……」

「なんですか〜?」

せんばいをカウンスター越しに頬づえを突きながら眺める私。

せんばいは白のワイシャツに黒のスラックスと、どっかの学生みたいな制服にモスグリーンのエプロンを腰からかけていて、今は私のために珈琲を淹れてくれます。

「やりづらいんだが……」

「なにがですか?」

ポットを小さくのの字に回しながら何回かに分けて落としていくせんばい。

「そんなに見られるとやりづらいんだが」

「せんばい自意識過剰じゃないですかー? 私が見てるのはせんばいじゃなくてその珈琲です。私に告白されたことがあるからってちよつと調子に乗ってませんかー?」

そうです。私は高校二年生の夏にせんばいに振られたのです。

花火大会でふたりきり、小さなベンチに座って肩が当たってドキドキしながら見る花火。

思い切つてせんばいにキスをして、そして振られた。

あの日以降ちゃんとお会うのはこの日が初めてで、学校ではほとんどすれ違いくらいになつてた。

普段の私なら振られたことぐらい臆せず話しかけていたはずだけど、どこか後ろめたさがあつたのかもしれない。

なにかせんばいに対し悪いことをしたという訳ではなくて、むしろせんばいに悪いことをさせてしまったというこの方が近い。

わかつていた。振られることを。

「そうですね〜一色みたいに可愛い後輩から告白されて調子に乗つてましたよ〜」

そんなことを言いながら私の前に淹れたばかりの珈琲を差し出すせんばい。

ふざけていてもせんばいから可愛いと言われるのは嬉しい。

「もしかして今私を口説こうとしてますかごめんなさい。せんばいのことは今でも好きですけど今になって口説かれるとちよつと引きます。口説くならもつと本気で婚約指輪渡すくらい勢いで来てくださいごめんなさい」

私思つたんですけど、断り切れてないですよね…

好きですつて言つちやつてるし。

「冷めないうち飲めよ〜」

私の告白をあつかりと流しましたよこの人。

「…一色、平塚先生から聞いたのか？」

せんぱいは自分の分の珈琲も淹れながらそんなことを聞いてきた。

平塚先生から聞いたのか、とはどういうことなのか？ いまいちわかりません。

「なにをですか？」

「俺がここで働いている事をだ」

「私はなにも聞いてはいませんよ。そもそもせんぱいが喫茶店で働いているなんて知りませんでしたし」

せんぱいは私立文系に行くと言ったので、てつきり私はバリスタになることは諦めたのかと思つてましたし。

「そうか」

「ほんとは今日友達とここに来る予定だったんですよ。このお店気になつてたから今度行こうねって」

「…一色、お前友達出来たのか？」

「できましたよー！」

信じられないというような顔してますよ、ありえないです。

まあ私は確かに同性から好かれなかったですけど、今は違います。

私には青峰葵という友達がいるんですから。

…今度絶対いちごパフェ奢ってもらおう…

「で、なんで結局今日ひとりで来たんだよ?」

まだ私を疑ってますね、せんぱい。

全く失礼ですよ。せんぱいだってぼっちのくせに。

「彼氏がどうのこうのってドタキャンされたんですよ…」

「その人別に一色のこと友達って思ってないんじゃないの?」

「失礼ですね、確かにまだ知り合って日が浅いですけど、ちゃんと友達してますよ。それに、向こうから友達になってって言ってきてくれたんですから」

入学式初日に友達ができるとは思ってなかったです。

前の自分なら、もしかしたらそんなことはどうとも思ってたかもしれないですけど。

私もう一口珈琲を飲むと同時に、奥でドアの開く音がした。おそらくは従業員用の出入り口からなのでしょう。

せんぱいもそれに反応して奥に行ってしまった。

いつの間にかせんぱいの背中は大きく見えた。せんぱいは私の知らないこの一年間でなにをしてきたのだろう。



私がそんなことを考えていると奥で話し声が聞こえてくる。

「栗原バリスタ、焙煎前の豆こっち置いときますからね」

「ああ、すまない」

「比企谷、今はお客いないの？」

「いや、ひとりいるけど、知り合いだから大丈夫だ」

「比企谷に知り合いとかマジウケる」

「いや、ウケねーから…」

どうやらせんぱいの他にふたりほどいるようで、ひとりには知らないけどもうひとりの声はどこかで聞いたことのある声だった。

そしてその声の主は珈琲豆の入った袋を抱えながら出てきた。

「あれ!? もしかして一色ちゃん!? ちよー久しぶりじゃん! マジウケる!」

「お久しぶりですー」

…誰だっけ? でも顔は知ってるはずです。どっかでみたなーみたいな感じですし、ふるわつとした髪と結衣先輩とはまたどこか違う明るさを放つこの人。

「折本、はしやぎ過ぎだ仕事しろ。また栗原バリスタに怒られるぞ」

「それあるー!」

そうでしたこの人、折本って人だ。確かせんぱいとおな中で、海浜総合高校の生徒会

の助っ人さんでした。

いやあ、みんなでご飯とか行ってきましたけど思いつきり忘れてました。

あ、そう言えばバレンタインのときもいましたよね、せんぱいにチョコあげるとか言っていました。

そうでした、雪ノ下先輩や結衣先輩の他にも恋敵がいたんです。

せんぱいって、なんでこんなに倍率が高いんですかね？せんぱいの大学より高いんじゃないんですか？

「比企谷君、君の知り合いという人を紹介してもらえないか？」

さらに奥から出てきたのは、どこか平塚先生のような雰囲気を出す女性。栗色の髪はポニーテールにしてまとめられているが相当に長い。雪ノ下先輩くらいには長い。

着崩したシャツとネクタイはやつと一息つけると安堵したためか、気が抜けているようだった。

鎖骨と首との微妙な位置にある小さなほくろがどこかまたエロい。

というか、私一応お客なんですけど…

「栗原バリスタ、こいつは俺の後輩で、一色いろはって言うんです」

「比企谷君の彼女か？」

「言ったでしょう、知り合いです…で、一色、この人がこのお店のバリスタの栗原美久里

(くりはらみくり)さんだ。平塚先生の高校時代の友人らしくてな、ここも平塚先生に紹介してもらったんだ」

「よろしくな、一色君」

「はい。よろしくです、栗原バリスタ」

挨拶を済ませた栗原バリスタは腕まくりをしながらエスプレッソマシンの前に立ち、メンテナンスをしているのか、なにやらいじくり始めた。

「そう言えば折本先輩、せんぱいはここで働いている経緯はわかりますけど、折本先輩はどうしてここで働いているんですか？」

せんぱいはわかる。バリスタの専門学校に行こうとしていたし、大学から近いこのお店は私立文系とバリスタを両立させることができるからだ。

だからせんぱいは専門学校には行かなかったのだ。たぶん。

でも、折本先輩は？

「私ね、比企谷と同じ大学なの」

「まあ学科は違うけどな」

「なんかさ、大学の食堂でご飯食べてたらさ、比企谷ひとりで食べてて。ちよーウケる」

「いや、ウケねーから…」

「せんぱい、結局大学でもぼっちなんですね…」

せんばいはどうして大学でもぼっちなんですかね？

結衣先輩や雪ノ下先輩とあんなに親しいのに。

まあでもせんばいは、大学にそういうものを求めてないのかもしれないですけど。

「でさ、ちよつと喋ってて、比企谷バイトしてるって言うからさ。私も丁度バイト探してたから紹介してもらったんだ。ウケるよね」

「いや、紹介してもらったっていうか、折本が紹介させたんだろ、断るの面倒そうだったし」

「私と比企谷の仲じゃん。別にいいじゃん」

「いや、あるときそんなに仲良かった訳じゃないだろ。てか今もだけど」

せんばいと折本先輩はやはりどこか親しげで、私の知らない一年間を、折本先輩は知っている。

まるで奉仕部の3人の会話を聞いているような気分になり、私はまたひとりぼつんと取り残されているように感じた。

「二色君、先ほどは比企谷ひとりで留守番をさせてしまつて悪かった。ここが一番のうりはエスプレッソなのだが、比企谷にはまだエスプレッソは淹れられなくてな」

「まあ俺はまだバリスタ見習いだからな」

「今日は特別に一杯サービスするよ」

そう言つて早速準備する栗原バリスタ。

その姿はどこか格好よくて、せんぱいもいつかそうなるのかなとちよつとだけ楽しみになる。

すぐにエスプレッソは淹れられて、目の前にはふわふわで細かな泡はリーフが描かれている。

飲んじやうのがもつたないって思つちやいます。

「頂きます」

ふわふわのクレマは、私の入れた砂糖を持ち上げてキラキラと輝いている。

その砂糖に願いを込め、終えて少ししてから沈み切った。

「一色、それ、覚えてたんだな……」

「……だつて、素敵じゃないですか？」

栗原バリスタの淹れたエスプレッソは、とても熱くて苦くて甘かった。

女子はどうか恋話が好きである。

日が暮れる手前で一色は帰り、その後はお客がぽつぽつ来ただけでこの日の純喫茶クレマの営業は終了した。

まさか一色にまた会うことになるとは思っていなかった。

久しぶりに会ってしまい一瞬キョドッていた俺に対し、一色はあまり変わっていないかった。

どこか吹っ切れているようなそんな感じで、奉仕部にいた頃のようにだった。

告白のことは無かったことに、という訳でもなく、むしろそれをネタのようにしていた。

しかもさらつと今でも好きですけどとか言われたし。

「比企谷なにニヤニヤしてるの？顔がウケるんだけど」

「別にニヤニヤしてなんかないですけど…」

…にやけてしまっていた。

「つーか、そっちの掃除は終わったのか？折本」

戻ったことに嬉しく思うと同時に、どこか申し訳ない気持ちになる。

「というかそもそも、俺が一色のようなあざと可愛い後輩に告白して玉砕することはあれど、告白されることは無いのだ。普通は。」

「もしも告白されて振りましました、という話を材木座にでもしたらどうなるだろうか。「リア充爆発しろ!」とリア充になつてないのに言われるのか。」

それとも、「八幡!恋愛シミュレーションゲームと3次元の区別もわからなくなつてしまつたのか?」と俺が妄言でも言つていられると思われるのか。」

それを材木座に言われたらなんかむかつくな…

「ねえ比企谷、バイト終わつたら駅前のファミレス行かない?私お腹空いてさー」

「いや、別に俺じゃなくてもいいだろ、それ。栗原バリスタと行けよ、女同士だし」

「時間とは凄いもので、逃げていても現状維持しても時間が解決してくれることもあるのだ。」

俺と一色だつてそうだし、目の前にいる折本とだつてそうだ。

「栗原バリスタ今忙しいんだつて、仕込み中だし」

「お前友達多いだろ、近くに誰か探して行けばいいだろ。大学にまだ残つてる奴とかいるかもだし」

「少なくともここで一緒に働き始めた頃はどちらも晩ご飯に誘つたりしていなかった。」

「だつて今から誘つても遅くなるし、比企谷なら暇そうだし」

どうしてか折本まで俺の扱いがちよつとひどい。由比ヶ浜や雪ノ下ほどではないのだが。

「俺を暇人と前提して誘うのやめてもらっていいですかね？」

「いいじゃん。…それにさ、聞きたいこともあるし」

持っていたほうきは胸の前で止まり、上目遣いで俺を見る折本。

一色ほどではないが、少しだけあざとさを感じた。

いや、実際には一色のせいであざとさを感じてしまうようになったのかもしれない。

中学のときの俺が今ここにいたらきつとまた勘違いをして再び告白して振られていたんだろう。

「…」飯食べたらすぐ帰るからな」

ただの気まぐれで今日は付き合ってやることにした。

「比企谷く、一色ちゃんとはどうなの？ やっぱりふたり付き合ってたとか？ ほらだつてクリスマススの合同イベントで最初に連れてきたの比企谷だけだったじゃん？ バレン



タイムのイベントのときも比企谷たちも参加してたし、やつぱりなにかあるんじゃないの〜？」

「…なあ折本、聞きたかったことって主にそれか？」

出された料理にろくに手もつけず俺と一色について質問攻めをする折本。

外はもうとつくに日が暮れて、午後9時を回っていて暗いのに対して折本の目はキラキラと輝いてる。

そう言えば由比ヶ浜も戸部の依頼のときにこんな顔とか目とかしてた気がする。

「むしろそれしかないよねー」

「…別になんでもねーよ。ただの先輩後輩だ」

折本に恋愛だとかそういう話をするとろくな事がない。大学にどう広まるかと思うと絶対言いたくない。

「じゃあ比企谷はさ、どう思ってるの？一色ちゃんのこと」

さっきの恋話に喰らいつく女子とは違い、落ち着いたその声と表情で、そして俺の目を見てそんな事を聞いてきたのだ。

それもただの恋話とかそういうもののはずなのに、なにか裏を感じるといふか、要するに俺の悪い癖。

こいつはなにをみようとしているのか、ふと会話をしているなかで思う。

いや、俺がそう考えてしまうのは眼を見てしまったからか。

「…まあそれに答えるとするならあれだな、あざとい高校の時の後輩、だな」

答えるのがなんとなく気まずくて、すっと窓の外に目を移す。

駅前というのもあって、午後9時になっていてもまだ人は歩いてる。サラリーマンもとい社畜、OLに家族連れ、カップルにぼっちの女子中学生。ん？

「へーそうなんだ」

「ああ…」

どこかで見た黒髪ロング、別にそれ自体は普通なのだが見覚えのある後ろ姿。

一瞬雪ノ下を思わせるような落ち着いた雰囲気、でも雪ノ下のように冷たくはないけれどどこか冷めている。

「そっかあ、じゃあ後で一色ちゃんからも聞いてこうつと」

「…ああ。って、なんで一色の連絡先知ってるんだよ…」

「お店で話してたときにちよつとね〜」

片手でスマホをいじりながら料理を食べる折本。いつの間に連絡先交換をしたのだろうか。

もう折本のコミュニケーション能力に関心すらしてしまうレベル。

まあもともと顔見知りだったということもあるとは思うが。

ふと先ほどの女子中学生のことを思い出してもう一度外を見たが、その子はもういなかった。

「ねえ比企谷……」

「今度はなんだ？」

「比企谷はさ、私のどこが好きだったの？」

使っていたスマホの画面を落とし、テーブルに置いた。ちよくちよく振動して、それがテーブルを伝って俺の紅茶も波打っていた。

うるさい奴を無視するように窓の外を頬杖を付きながら眺めている。

「……なんかさ、私の事を好きだって言ってくれてるひとがいてさ、でもね、どうして？って聞いたらさ、テキストに横文字とか並べて誤魔化すの……」

いつもサバサバしている折本の、そういうしんみりとしているというか、なにかに對し悩んでいるところを初めて見た気がする。

「それは俺に恋愛相談をしているのか？」

正直俺に恋愛相談をされても困る。仲を悪くさせることを教えることは出来るかもしれないが、やはりそういうのは俺に向いていない。というかそもそも恋愛経験などないのだ。

「まあ比企谷にそんなこと聞いてもって感じだよねー」

ウケる、と言いながら冷めきった紅茶を飲む折本。

再び震える折本のスマホ。

人の自分に対する好意に、好きという気持ちに、どう返したらいいのか、俺はわからない。というか俺の場合、面と向かつてはつきりと好意を伝えてくれたのは一色だった。キスマでされて、これは勘違いだと考える間すらなかった。

「私さ、たぶん断るための理由を探してるんだよ。その人のこと別に嫌いじゃないけど、別に好きでもない。私自身に好きなひとがいる訳ではないから、それで断るのは嫌だし」

「折本はあれだな、結構まじめというか、ちゃんとしているというか」

「私は普通にまじめだし」

確かにまじめではあるのだろうが、やはりサバサバしているという印象がどうしても強く、悪く言えばキャラついているように見える。

折本はもつと恋愛に対して軽い感じなのだと思っていた。

「でもさー私、比企谷のこと気にはなってるんだよねー。だつてさ、比企谷ちよーウケるし」

「いや、別に俺はウケることは特にしてないから…」

「いやちよー面白いし」

俺を見ながらクスクスと笑う折本。こういうところは中学のときから変わっていないと思う。まあそれほど仲が良かった訳ではないけれど。

「じゃあそろそろ帰ろっか。ありがとね、付き合ってもらって」

会計を済ませて外に出て、さっきの女子中学生がいなかったかと見てみたがやはりいなかった。まあ見かけてから時間が経っているためいるはずもない。

そもそも見間違いの可能性もある。ただの気のせいだ。

「比企谷」

「なんだ？」

「一色ちゃんと進展あったら教えてね。ちよー面白そーだし」

面白い話を期待されても困る。

「折本」

「なにー？」

歩き出していた折本を最後呼び止めた。振り返る折本のふわふわとした髪が揺れる。

「俺に恋愛の話を期待するのは間違ってるぞー」

「それあるー！」

クスッと笑ってそう言われた。

一色いろはの友達が可愛いのは間違っていない。

大学の授業とは長いもので、俺のようにどここのサークルに所属しているわけでもない奴だどどう間の時間を潰そうかと考えてしまう。まあ結局は図書館に落ち着くのだが。

一度はサークルに入ってみようかとも思ったのだが正直、俺がそういったものに入ったところで続くはずがない。

すぐに人間関係でトラブルになったり、結局仲良くなれなくて、そこに居づらくなり幽霊部員となりそして忘れられるのだ。そもそも俺が人とそうそう上手くやっていくはずがない。

奉仕部は強制的に入れられて雪ノ下と競わされたりだとかだったし、俺たち奉仕部の3人が、奉仕部を大切だと思えるようになったのだからある意味奇跡だと思う。

平塚先生には感謝してもしきれない。平塚先生が早く結婚出来るように祈っておこう。

もうほんと色々残念な人ですがどうか幸せにさせてあげて下さい。

ほんと誰かもらってやってくれよ…。

「比企谷く一緒にクレマ行こ」

「おう」

俺の席より後ろで女子同士きやつきやうふふしていた折本は抜けるタイミングを見計らつてこつちにきた。

日によつても変わるが今日の最後の授業は折本と被つていて、こうした日は一緒バイトに行くようになってる。とかいかいつの間にかそうなつていた。

それにしても女子つてのはよく喋るものである。由比ヶ浜もホームルーム終わつてからあーしさん達とよく喋つてたし。

そして俺が部室に行くと後から追いかけてきて由比ヶ浜にカバンで叩かれるのだ。なにそれ理不尽。

「今日さ、一色ちゃんがお友達連れてくるんだつて」

一色がお友達を？ いやいや嘘だ。だつて一色つて、クラスのみんなから悪ふざけで生徒会長に立候補させられるくらいなんですよー。

まあ8万歩譲つたとして（八幡だけに）、女子ではないだろ。

だつて考えてもみろ、俺は一色が女子と仲良くしているところなんて、奉仕部において由比ヶ浜達と喋つているところぐらいしか見たことがない。多分。

クリスマススの合同企画のときは猫被つていただけだし。

「折本、その一色のお友達とやらは女子なのか？」

「女子って言うてたよ。あ、もしかして興味ある的な？可愛かったらどうしようとか思ってる感じ？なにそれウケる」

後半笑い出す折本。どうしてそう笑っているのかよく分からないが、笑われているのはやはり不愉快だ。

「いや、ただ単に一色に同性の友達ってあまりいなかったからな。ちよつと不信に思っただけだ」

「え〜嘘だ〜。一色ちゃん可愛いのに？」

まあ原因は可愛いからなのであるが。

要するに、可愛いだけのいろはちゃんが悪いんじゃない、バーカバーカ。である。

「つていうか比企谷、心配してたんだ？一色ちゃんのこと」

「そんなんじゃねーよ」

折本は人の色恋沙汰や甘い話が好きなのか、そういう話になるとやたらと食いついてくる。大学で再会して少しすると、由比ヶ浜や雪ノ下とはどうなの!!?と興味を示していた。：要するにすごい面倒くさい。

その後もクレマに向かう道すがら俺は折本にからかわれていた。

やつとクレマに着くとフロアで一色と栗原バリスタともう一人の声が聞こえてきた。

まさか本当に一色の友達なのか？エア友達だと思っていたのだが。



とりあえず俺と折本は制服に着替えて栗原パリスタに挨拶に行った。

「おはようございませす、栗原パリスタ」

「おはようございませす」

「おう比企谷くん、折本くん」

こつちを向きながらもエスプレッソにラテアートを施している。流石栗原パリスタである。

「せんぱい遅いですよ。私も葵も待ちくたびれましたよ」

「この人がいろはすの言つてた人なんだ…」

いちいちあざとい一色の横には見知らぬ女子がいた。

顔立ちが整つていて、どこことなく海老名さんに雰囲気似ているが海老名さんの様な変態な感じはなく、すつきりとしている。

サラサラとした黒髪ショートと青いふちのメガネも海老名さんを連想させる。

まあ海老名さんは青いふちのメガネだったかは覚えていないが…

メガネが似合う女子は八幡的にポイント高い。

まああれだ、要するに、思つていたより可愛い。

「せんぱい、葵に自己紹介して下さいよ」折本先輩もですよ」

二人分のエスプレッソを淹れた栗原パリスタが一色とその友達に差し出した。エス

プレッソに浮いたふたつの葉っぱはとても綺麗に描かれていた。

「あ、ああ。比企谷八幡だ。一色とは、あれだな、高校の時の先輩と後輩だな」  
「私は折本かおり。一色ちゃんとは最近仲良くなった感じかな。よろしくねー」

一色は俺らの自己紹介を聞かずエスプレッソの写メを撮っていた。

いや、お前も一応聞けよ…。

「私はいろはすと同じ専門学校の生徒で、青峰葵って言います」

「せんぱい、葵は彼氏いますから狙ったりしないでくださいよ」

「いや、別に狙ったりしないから」

ジト目で俺をにらみつける一色。

甘いな一色、そんなんじや俺の防御力は下がらない。

というかもう下がらない。

青峰のメガネが珈琲を飲んだために少し曇っている。すぐにメガネはもとに戻ったが、一色が青峰のそれを見て楽しそうに戯れている。

俺は女子同士の友情はよく分からない。由比ヶ浜と雪ノ下はまた別のものというか、特別なものと見ていて感じた。

一色と青峰を見ていて少なくとも一色は楽しそうで、友達ごっこをしている様には見えない。

ふたりを見ていてどこかホツとしている自分がいる。

一色が奉仕部のふたりとはまた違う繋がりをも自分で作れるようになったからだろうか。

もしもそれが、総武高校生徒会長になって、奉仕部と関わってそうなってくれていたのだとしたら、それはまあいいことである。

「比企谷、ふたり見てなにニヤニヤしてんのー?」

「せんぱい、きもいです」

「いや、別ににやにやしてないから」

折本のせいで青峰も苦笑いしてしまっている。なんか俺の印象最悪じゃね? まあ別にいいんだけど……今さら気にしないし。

「せんぱい、アツプルパイくださいー」

「比企谷さん、私も同じものを」

「はいよ」

はいはいアツプルパイねー。俺が用意してる間にも折本はふたりとお話し中である。

ちよつと栗原バリスター折本がさぼってるんですけどー。

つて言つてもやる事はそんなないからな。

栗原バリスターはエスプレッソマシンの手入れをしながら3人の会話を聞いている。

それが楽しいのかほんのり鼻歌まで聞こえてくる。

「そうだ栗原バリスタ、自分達のカップをクレマに置かせてもらうことつて出来ますか？」

「二色、要するに奉仕部のときのように自分専用のカップをここに置いておくということか？」

「はい。何て言いますか、常連っぽくないですか？」

まあ一色は奉仕部の常連さんでしたからね。よく仕事から抜け出して奉仕部に来ては放課後のティータイムを過ごしていた。そして平塚先生に連れ戻されたりする。

「まあそうだな…。比企谷くんや折本くんの友人でもあるし、それで一色くんと青峰くんが更にクレマに来てくれるというならまあいいだろう。折角だから、比企谷くんと折本くんもここに置いたらどうだ？」

「なにそれいいじゃん！マイカップ。比企谷、今度買いに行こうよ、定休日使つてさ」「俺は…」

「比企谷くん、」

俺が言い訳を用意しようとする前に栗原バリスタに遮られてしまった。バツチリ目もあつてしまい俺は観念した。

やっぱりこの人はどこか平塚先生に似ている。

「私の分も君に買ってきてもらいたい。もちろんセンスのいいものを。場合によっては時給も上がるのかもかもしれないな……」

「比企谷、逃げないでね」

折本の屈託のない笑顔で完璧に行かされることが決定した。決定してしまった。

折本は既に一色と青峰と話に入っている。

「あの、折本さん、私もご一緒していいんですか？」

「当たり前じゃない！あ、もちろん彼氏さんとの予定があつたならまた別の日でもいいし」

「それは大丈夫ですよ。デートの予定とかなない日ですし、ご一緒していいなら是非！」

俺を無視してどんどん話は進んでいく。

あくなんかデジャブだなー。奉仕部でもこんなによくあつた気がする。

「比企谷くん」

「はい？」

栗原バリスタは淹れたたてのエスプレッソを俺に差し出した。スチームドミルクも通常より多く通常よりも少しだけぬるめに。

猫舌の俺のためにぬるくても美味しいようにしてくれている。

「君のことは平塚から頼まれてるからね」

栗原バリスタが淹れてくれたエスプレッソを飲む俺を優しく微笑みながら見ている。

くれた。

いつもより暖かく感じた一杯だった。

定休日は家でだらだらするか本を読んでいるかしかしていない俺がどうしてか、今は俺の家で青峰とふたりきりである。

…どうしよう、すごい気まずい…

「すいません、上がらせてもらって…」

「いや、まあいいよ。どうせすぐ一色も戻ってくるんだろ？」

要するにこういう事らしい。俺を逃さない為にあらかじめ俺の家に行き俺を引きづり出そうという事らしかった。

そしてなぜ俺の家を一色が知っているのかというと、栗原バリスタから聞き出したそうさ。

どうやら俺の個人情報保護法は守られていないようだ。

「まあとりあえず飲めよ」

あいにく客に出せるものは珈琲くらいしか無く、わざわざ青峰の為に豆を挽いて出してやった。

元々客が来る事など想定していないのでしようがない。

「ありがとうございます」

俺の部屋をちらちらと見つっ目の前に置かれた珈琲を口にする。

言っておくが、睡眠薬だとか青酸カリとかは入っていない。アーモンド臭なんてしない。

「一色はどうしたんだ？直前までは居たんだろう？」

「はい。直前で折本さんがここに向かう途中で迷ったそうで、いろはすが迎えに行ってしまうて……。いろはすが、せんばいは葵を襲ったりは絶対しないからふたりで待ってって」

たぶん青峰は気を使ってくれているのだろう。こういう場合へタレだとかなんだとか貶されている場合が多い。

俺に対する罵詈雑言とかかそういうのを抜いて話してくれているのだろう。

一色の友達にはいい子である。

「ふふっ。」

どうやら俺への罵詈雑言を思い出して笑っているようだ。

「比企谷さんってやっぱりいろはすと仲良いんですね」

「どうしてそう思う？」

もう一度クスツと笑い珈琲を飲んでから青峰は答えた。

「いろはすつていつも比企谷さんの話するんですよ。せんぱいがさくつて」

「まあ十中八九愚痴とか悪口だろ」

あのぼっちめ、よくも私の告白をくとか言つてそう。

「まあそうでしたけど、比企谷さんのこと、楽しそうに話すんですよ。絶対好きですよ」

…まあ告白もされたし再会してからも言われたしな。今でも好きですつて。

…あれ？それは俺の勘違いだけ？

「比企谷さん、連絡先教えてくれませんか？お悩み相談とかもしたいですし、いろはすの相談とか聞いてあげられますし」

「でもあれじゃないか？青峰は確か彼氏居るんだろ？そういうの大丈夫なのか？」

なぜだろうか。こういうとき、避ける方向に進んでしまう俺がいる。

いつも、何かしら理由を付けて逃げている。

「大丈夫ですよ」

「そうか…じゃあまあ交換しとくか…」

ここで無理に逃げると何か怪しまれてしまう。いや、別になにもやましい事はないがそう思われてしまうのではないかと思ってしまう。

考え過ぎだ。



青峰と連絡先を交換してすぐに一色と折本は俺の家に来てそれからシヨツピングをして帰った。

どうしてか、新しく加わった連絡先に対し戸惑いを感じた。

同日の定休日、栗原はお店に忘れ物があつた為クレマに来ていた。

元々忘れ物を取りに來ただけのはずが、どうしても珈琲を飲みたくなつた栗原は珈琲を入れ始めた。

「…静かなお店というのはやはり落ち着くな…」

別に普段の賑やかな雰囲気駄目だということではない。

ただ、こうして静かに過ごすことに違うやすらぎを感じているだけなのだろう。

栗原はもう一口飲むとふとドアの向こうに誰かが居るのに気が付いた。

明かりはつけてしまっているがドアには「本日は定休日」と書かれた札が下がっているはずなのだ。

栗原がドアに近づくとその誰かがドアから離れて行くのがわかつた。

すぐに栗原がドアを開けると、その子は振り返つた。

「あ…」

「いらつしやいませ」

その子は中学生くらいの子で黒くツヤのある長い髪だった。中学生にしてはど  
こか大人びた雰囲気も感じる。もしかしたらもう高校生かもしれない。

「今日は定休日なのだが、せっかくなので来てくれたんだ、一杯どうかね？」

「あ…すみません、今日はっ」

そのまま彼女は走り出してしまった。

彼女は一体なんだったのだろうかと思いつつ残りの珈琲を飲み干した。

雨に濡れた黒猫を比企谷八幡は放っておけない。

梅雨。どうして梅の雨と書くのだろうか。

たぶん誰しもが一度は思ったことかもしれない。

別に梅が降ってくるわけでもないし、たまに口に入ってしまった雨粒が顔を歪めるほど酸っぱいわけでもない。というか味なんて特にしない。

前に一度辞書で調べたときに何かしら書いてあった気がするがよく覚えていない。

まあ梅雨は嫌いじゃない。好きでもないが、俺は別にアウトドア派の人じゃないし、むしろ家を出なくていい理由とか言い訳にもなる。あまりにも湿気が凄いと文庫本がふにやふにやしてしまうのはどうかしてほしい。

そう言えば秒速〇センチメートルの監督の人が作った言の葉〇庭ってアニメーションも良かったな。あれを見るとどうしてか雨が好きになってしまっそうになる。俺も今度から雨が降ったら大学をサボってしまおうか。

「今週から梅雨入りだっさ。私は雨好きじゃないんだよねー。ジメジメってしてるっていかさー」

雨が好きじゃないという割にはいかにもお気に入りの傘をどこか楽しそうにくるく

ると回している。

まあお気に入りの傘があると雨の日も悪くない気もするのはわかる。

気に入った傘を買った次の日の朝はどこかで雨を祈ってしまったている自分がいる。

「そうだなー」

「比企谷はあれだよ、別に家から出ないから関係よねー。なにそれ引きこもり？ウケる」

「いや、別にウケないから」

こいつは本当に幸せなやつだな。そんなことでウケるんだからさぞ人生が楽しいのであろう。

世界中の人々がみんな折本みたいに簡単にウケるのなら世界は平和になるだろう。

「そういえばさ、ちゃんと栗原バリスタのマイカップ持ってきた？」

「ああ、持ってきた」

「比企谷ってそういうのちゃんと真剣に選んでたから意外だったなあ」

妹から教育されてますからね。

まあ普段から栗原バリスタにはお世話になっているし、真剣に選んだとしても普段の恩を返すには足りないだろう。

人間、返せる時に返すことが一番である。

「そう言えばさ、昨日葵ちゃんとちよつとだけ二人きりだったんでしょ？なに話してたの？あ、もしかして葵ちゃんのこと口説いてたりして。ウケる」

「二人きりだったというか、単に二人きりにさせられたんだだけだな。折本が迷ったせいで」

青峰も全く可哀想である。

普通に考えてもみる、いきなり友達がどつか行っちゃってついこの間知り合ったばかりの男と部屋で二人きりだぞ？しかも相手は目と根性が腐っていると評判のこの俺だぞ？絶対危機を感じる。

…なんか自分で言ってる悲しくなってきた…

「あの後さ、帰ってから葵ちゃんからライン来てて、『比企谷さんの淹れてくれた珈琲美味しかったです』って来てたよ」

「まあ、客に出せるものなんて珈琲くらいしか出せなかったからな」

来るなら来るとそう言っただけよ全く。男の一人暮らしはいろいろあるんだから  
：

たまたま掃除してたから良かったけど。

「私も比企谷の淹れた珈琲飲みたいな」

「じゃあシフト休みの日にでもクレマに來ればいいだろ？」

折本は遊んでばかりだからたまにはクレマでゆっくり過ごすのもいいとは思うのだが。

「それじゃお店の味じゃん。比企谷ブレンドが飲みたいの私は！」

「確かにお店の味は栗原バリスタが豆を選んでブレンドしているが、俺は市販の豆を使っているだけだ。欠陥豆は取っているが、別にブレンドしているわけじゃない。それに俺がブレンドするにはまだ早いんだよ、知識も経験も足りない」

折本は喫茶店で働いている割に珈琲についての知識や興味が薄い。まあそれは仕方のないことではあるが、働いているのだからもう少しは勉強してほしい。

「…そういうことを言いたかったんじゃないんだけど、まーいつか」

どこかそっぽを向いてポソツとつぶやく折本。

基本サバサバしたやつだが普通にいじけたりだとか、そういう感情も見るが増えた。

まあ大学が一緒にバイト先も一緒なのだからそれはまあ当然なのだろう。

「でも今度比企谷ん家行くときがあったら飲ませてね、珈琲」

「はいはい」

そう何度も人を家に入れるつもりがないのだが…

それにほら、あれじゃん？女の子を家に連れ込んだら妹が突然来てたとかありそう

じゃん？俺、小町にカギ渡してあるし。しかもあいつ、何の連絡もなしに来るからな。「愛する小町からのサプライズだよ!!」？あ、今の小町的にポイント高い！」とか言うし。まあ別に可愛いから許す。

気がつくとかクレマは目の前だった。

いつもは暖かな光がクレマの看板を暖めていてくれているのだが、そんな光は分厚そうなる雲に埋もれている。

雨の匂いが薄つすらと漂い始めていて、俺も傘を持ってこればよかったと後悔した。帰る頃に降っていないといいのだが。

「比企谷ー？」

「何だ？」

傘を振り回していた折本が俺の方へ振り返った。

「栗原バリスタ、喜んでくれるといいね」

「まあ、そうだな。折角定休日潰して買いに行ったんだしな」

「なにそれ〜」

折本との今の関係が、俺は割と気に入っている。

だがこれは俺が奉仕部にいたからこそ今もこうしてあるのだろう。

折本がクレマに入るのを見て俺も後に続いた。

「降ってきちゃったね。雨」

「葵、私傘持つてきてないから帰るとき入れて〜」

「相合傘だね」

しとしとと降り始め、店内のBGMを打ち消していく。不思議とそれがどこか心地良く思わず窓を見つめてた。

横では栗原バリスタがエスプレッソマシンを弄っている。

「極細挽きから粗挽きに。」

「店長さん、なにをしているんですか？」

青峰は栗原バリスタのことを店長さんと呼ぶ。バリスタというのがしっくりとこないからだろうか。

「今私がしているのは挽く豆の細かさを調整しているんだ。どうしてそんなことをしないといけないんだったかな折本君？」

「ええ〜？ 確か、挽いた豆は細ければ細かい程空気中の水分を含んでしまうから？ だっけ？」

苦し紛れではあるが間違っではない。正解というわけにもいかないが、さんかくく



らいはもらえるだろう。

「惜しいな。では比企谷君、折本君の補足をしたまえ」

「吸収したものをそのまま使ってしまうと雑味が出てしまうからです。だから雨の日や湿気が多い日には少し粗めに設定して味を調整している。…これでいいですか？」

一色と青峰は意外そうな顔で俺を見つめている。

…なんだよその顔は。

しかも青峰もなんか俺に対して失礼じゃないですかね？まあいいけど。

「まあそれで正解といったところだ」

「さっすが比企谷！」

まあこれに関してはマンガで読んだこともあったためよく覚えていた。

たまたま正解できただけに過ぎないが、まああれだな、悪い気はしない。

ふと、由比ヶ浜や雪ノ下はどんな反応をするのだろうかと思ってしまった。由比ヶ浜はアホな顔をして俺を普通に褒めそうなのか、雪ノ下はこんなときでもさらつと罵倒することを忘れないだろうか、そんなある種未練があるような。

雨は今も降り続け、一色と青峰は日が暮れるであろう時間までクレマで話し続けた。

店を出た後も雨は休むことなく降り続けていた。止む気配など一向になく、傘を持っていない俺は傘を買って帰るか止むのを待つかのどちらかになった。

止まない雨はないとは言うけれど、こと梅雨に限ってはそう言つてはられないだろう。むしろ止んでしまつたらそれは梅雨ではなくただの雨だ。

そんなどうでもいいことを考えながら最寄りのコンビニへと向かう。

一步一步進む度に靴下が湿っていくのがわかる。

珈琲の様に雑味が出るわけではないが水虫でも湧いて出てくるのでないかと嫌になる。

コンビニに着き傘とあつたかいマツカンを二本買つてすぐに出た。ビシヨビシヨとはいかないまでも服や髪が少し濡れてなんとなく寒い。

マツカンを飲みながら15分程で着く家へと歩く。

もう一本は自分へのご褒美ということにして買った。なにそれ残業終わりのOLみたい。

雨のせいか視界が悪く、いつもはよく見える長い歩道や街路樹は短くて少なく見えた。

向こうから中学生か高校生か、傘もささずに歩く女の子いた。制服は雫が滴り落ちるほど濡れて、羽織っているブレザーがどうにか透けているであろうシャツを隠してい

た。

そしてなぜ俺がそんな子を凝視とはいかないまでも見てしまったのかというと、俺はおそらく知っているのだ、この子を。

クリスマススの行動イベント以降会った覚えはないがきつとそうなのだ。

三年たった今もその大人びた雰囲気は纏っていて、濡れた長い黒髪には綺麗だとすら思ってしまった。

今、どうして彼女が雨に打たれながらここにいいのか、なにかあるのではないかと考えながら彼女の前で立ち止まった。

「……」

俺は何をどう声をかけていいのかもわからないまま、そして彼女も立ち止まった。

目が合い、彼女は目を見開いた。それから少し悲しそうな顔をした。

「……あ、」

「……」

「……マツカン飲む？」

微かに当たった彼女の手は冷たかった。

「…八幡、これ、なに？」

風呂から出てきたルミルミは俺がとりあえず貸したTシャツの裾を掴みそう聞いてきた。

「なにつて、『千葉』Tシャツだけど？」

はああ、と小さくため息をついたルミルミは髪を乾かしに行った。

帰り道に留美と会いどうしようか迷った挙句、とりあえず風邪を引かないように風呂に入れるために俺の家に連れて帰った。

帰り道には一言も喋らず、ただマツカンを飲んでいた。

さっき喋ったのが第一声だった。

このまま喋ってくれなかったらどうしようかと思つたが、風呂に入って少しは落ち着いたらしい。

終始無言の女子中学生をどうにかするなんてことはぼっちの俺には無理だっただろう。

「ルミルミ、髪乾かしたらとりあえず家まで送るから…」

乾かす手を止め、俺を睨みつけるルミルミ。

…すみませんちよつと怖いんですけど…

「八幡キモい。…留美って呼んで」

再び髪を乾かし始める留美。

女子中学生に男物のTシャツは少し大きかったのか、ドライヤーを持っていない方の肩が少しずり下がっていて少しエロい。と言っても小町もよくこんな格好をしていたのでそこまでドギマギはせずに済んだ。

ふともう一度ドライヤーを止め留美は俯いた。

「…帰りたくない」

ぼつりと、留美は独り言の様に言った。

鶴見留美にもそんな想いがある。

「八幡、今日、ここに泊めて…」

帰りたくない、どうして帰りたくないのか、それを聞いた方がいいのだろうか。

留美を泊めるのだとしたらそれを聞いても悪いことではないだろう。事情があつて今留美はここにいます。

家に居たくない理由、それはおそらく家族のことだろう。鶴見留美の家族のことに関し俺が何か言っているわけではないのだろうし、そもそも俺と留美の関係性はとても薄いのだ。

知り合いとか、名前を知っていて話したことがある、その程度のはずだ。

というか普通、家に帰りたくないのからと言って知り合い程度の異性の家に泊まろうとするだろうか？

留美を見るとどこか寂しそうで、不安そうだ。

俺はどうしたらいいのだろうか…

「…近くに友達の家とかないのか？」

目を逸らし膝を抱え体育座りをして顔を半分ほど疼くめている留美。白く綺麗な足

は透き通るようで瑞々しい。

「友だち、いない。転校して来たばかりだから…」

「…どうして家に帰りたくないか、聞いていいか?」

未だにどう人に踏み込んでいいかがわからない。きっとそれは俺が他人に踏み込むことを怖がっているからなのだ。

「まあ言いたくないなら言わなくてもいい。俺がその事に対して、なにかしてやれるかはわからないんだし」

もしも、留美がこれを依頼として俺に話してくれるのなら、俺はきっと留美の為になにかしたいと思ったのかも知れない。

もう、奉仕部の部員なわけではないんだけどな。

留美はやはり理由を話したくないのか口を閉じたままどこを見るでもなく考え事をしているようだった。

今留美に踏み込むことはことの解決において正しくはないのかもしれない。だが今のこの現状について留美に俺がしてやれることはなんなのだろうか。

時計はもう9時を過ぎていて、俺の家に来てから誰かに連絡をとったところを見ていない。とりあえず今俺がすべきことは留美を家に帰すかひとまず泊めるか、である。

…でもなあ。普通に考えてだめだろ。大学生が中学三年生の女の子を家に泊めるん

ですよ？

手を出さない自信はある。そうだ、俺は理性の化け物だ。

落ち着け比企谷八幡、be cool

落ち着いて深呼吸をするんだ。スーっハー。スーっハー。

トレツビアーン!!?

まあ本当に留美の前でやる訳はないが…

「…八幡、なんかすごいキモいんだけど…」

まるでゴミを見るかのように、というか本当にゴミだと思われているだろう。

…て言うかさつきは何を考えていたのだったかしら？あ、そうだな、留美をどうする

かだな。

この状況を由比ヶ浜や雪ノ下が知ったらどうなりますかね？まあとりあえず通報さ

れるだろ？その次に罵られるだろ？

…とりあえず通報されるのは嫌だな…

もう罵倒とかは慣れてるからいいけどさ。むしろ留美に言われるのは癖になるま

である。

「で、どうなの？…」

「ん？何が…」



「…泊めてくれるの?」

はああとため息をついてから聞き直した。

「ルミルミの言葉足らずな所は変わってないな」

「キモい。八幡キモい」

あらやだ、ルミルミがどんどん雪ノ下に似てきたわ。八幡どうしましょ?

「仕方ないから今日はとりあえず泊めてやる。だが親御さんには連絡入れとけ。俺がお前を誘拐したとかにでもなったら非常に困る」

「…お前じゃない。留美」

大事にでもなられては困る。それに今この時間に留美を連れて歩くと確実に通報される。

というか昼間でも通報されかねない。

なんだよもう、どうしようもなくね?俺。

「…わかった」

渋々スマホを取り出し電話をかけ始めた。

電話をすることすらも嫌なのだろう。なかなかの不機嫌オーラを纏っている。

留美さんマジ怖いです。

「とりあえず留守電にメッセージは入れといたから、もう大丈夫」

「出なかったのか?」

「仕事中だから」

両親が仕事で帰ってくるのが遅い、それは俺たちも同じだった。まあ俺には小町がいたし、特にそのことについて不満はなかった。

むしろ小町と二人きりでいられて良かったまである。

まあカマクラもいたけど。

ふと留美を見ると可愛いおめめを潤ませながら口に手を当て欠伸をしていた。

なんだろう、すげー可愛いんですけど。

「う〜ん…」

右手で目を軽く擦っているため、左の方の鎖骨が見える。

小町なら特に意識することもなかったのに、ついつい見てしまう。やばい、捕まる…

「そろそろ寝るか? 明日は昼からバイトも入ってるし」

「うん…」

「とりあえず留美は俺のベット使え。ちゃんと暖かくしてし寝ろよ?」

くすくすと留美は笑った。今の会話のどこに笑えるところがあつたのか全くわからないが、留美が普通に笑っているのを見るとどこかホッとすする。

「八幡つてさ、…お兄ちゃんみたい」

「留美は妹みたいだな。まあ俺にはちゃんと妹もいるが」

「…おやすみ」

「おう、おやすみ」

とほとほベツトへと向かう留美。俺も照明を落としてソファーに寝転がる。

真つ暗、というほど暗いわけではないがやはり暗い。数秒もすると目は慣れてきた。

雨はまだ当たり前のように降っていて、無機質に打ち付ける雨の音が心地いい。

今日はとりあえず留美を泊めたが明日はどうなるだろう。留美の今抱えている問題をどうにかしなければいけないが、どうしていいかわからない。

千葉村のときの件については俺が勝手にやったことだ。なにか留美に頼まれた訳ではない。

まあ正確には俺が考えたことをやらせたわけだが。

クリスマスのときに再び留美と会い、そしてその状況はあまり良くはなっていないかった。もしかしたら多少はマシになったのかもしれないが、結局は俺の自己満足でしかなかったのだ。

「八幡…」

俺を呼ぶ声。それはとても小さく、寝言でつぶやくようなほどに消え入りそうだった。

「…あのときはありがと。…お礼を言われることは何もしてないって、八幡は言うかも  
しれないけど」

あのとき、留美の言うあのときは千葉村のときだろうか、それともクリスマスするとき  
だろうか。

どちらにしても本当に留美にお礼を言われるようなことはしていない。

けれど、留美の言葉に少しだけ救われたような気持ちになる。

すーっと肩の力が抜けていくのが自然とわかった。

「八幡、…おやすみなさい」

その、おやすみなさい、がとても心地良くてそのまま眠りについた。

暑い、そう感じて目が覚めた。

なにかが俺にもたれかかっている、それがやたら熱い。

その熱さが俺の意識を一気に覚醒させた。

少し苦しうに呼吸をしながらもたれかかるといふよりはしがみ付  
いている、という方が正しいのかもしれない。

額には汗が浮かんでは俺の服へと落ちていく。

顔が赤く留美がどれだけ苦しいかが熱と一緒に伝わってきた。

「…留美、大丈夫か？」

どうしていいか、わからなくなる。

「留美がこんなにも苦しそうにしているのにもかかわらず俺はそんな留美を見てうろたえている。

情けない。

俺の服を握る留美の手に一層力が入る。

とりあえず留美を抱えてベットにそつと寝かせた。

薬を飲ませようと思いつき取り出すも、留美に何も食べさせていないことを思い出しコンビニへ向かった。

走れば5分で着くはずの道は今だけかやたら長く感じた。

雨がまだ降っていたことに気付いたのはコンビニに着いた頃だった。

必要なものを買って再び家へと走る。

次はどうすればいい？とりあえず食事を取らせてその後薬を飲ませる。でも先に病院に行った方がいいんじゃない？

当たり前なのがわからなくなる。

もし風邪なら市販の薬でもなんとかなるはずだ、それでダメなら病院に行くしかない。

い。

家に着き靴を脱ぐ。雨でぐちゃぐちゃになった足は気持ち悪く、濡れた靴下を悪態をつきながら籠に投げ付けた。

俺が留美の側に来ると留美は目を覚ました。さつきよりも顔が赤いようにも感じる。

「留美、大丈夫か？」

「…うん。大丈夫…」

少し苦しそうにしつつも笑う。

その笑顔を見たからか俺も冷静になれた。

「とりあえずスポーツドリンクだ。…あとはゼリー、ゼリー食べたら薬だからな」

「うん」

今は食欲はないかもしれないがゼリーくらいはどうか食べられるだろう。留美のために各種取り揃えた。

留美がゼリーを食べている間に体温計を探し出す。

とりあえず食欲はあるらしくすぐに留美はゼリーを食べ終えてしまった。

取り出した体温計を差し出し、買ってきた熱さまシートも渡す。

「…八幡、これ貼って…」

「自分で…わかったよ貼るよ」

断れないって。

顔を赤くして目を潤ませて頼まれたら断れないって。

破壊力がすごかった。俺が中学生の頃なら一目惚れは間違いなかった。

貼ると言ってしまった手前、仕方なく中身を取り出す。

貼る前に留美の額を濡れた布で拭く。濡れた布は気持ちがいいらしい。

「留美、シート貼るから前髪自分で上げてくれ」

「うん」

「…デコちゃん」

「八幡キモい」

おでこを見られるのが恥ずかしい少しそわそわしている。

恥じらう姿に可愛らしいと思ってしまう。

露わになった留美のおでこにシートを貼る。いい感じに貼れたと感心していると不

意に留美と目が合った。

そして思っていたよりも距離が近い。もしかしたら俺の息がわずかにかかっている

かもしれない。

「八幡…ありがとう」

「お、おう」

きっと俺も留美と同じくらいには顔を赤くしてしまっているだろう。俺もシートを貼ろうかな。

その後に薬を飲んで落ち着いたらしく、留美はうとうとし始めた。

こくりこくりとする留美の頭をなるべく優しく撫でる。

「とりあえず寝ろ」

「うん」

そのまま留美は気持ちよさそうに眠りについた。

留美の寝顔を見ていてふと気がつく。時間はもう10時を過ぎていた。

昼からバイトがあつたことを思い出し栗原バリスタに電話をかける。

『もしもし私だ。どうした比企谷君?』

「おはようございます栗原バリスタ。あの、すみませんが今日だけ休ませて頂けないですか?」

しばし沈黙の後に栗原バリスタは答えた。

『わかった。君が休ませてくれと言ったのはこれが初めてだね。まあ理由は聞かないよ。明日は出れるかね?』

「はい、出れます。…ありがとうございます栗原バリスタ」

『では明日』



「はい、失礼します」

それから留美の看病をしていたがいつの間にか俺も眠っていた。

## 比企谷八幡はひと手間をかける。

降り続く雨と、微かな息遣い。

いつの間にか眠ってしまったって、もう夕方だった。

留美は葉がだいぶ効いたらしく落ち着いている。その留美の顔を見て改めて安心することができた。

少し捲れた毛布をかけ直してコーヒーでもと思いキッチンへ向かう。

「…八幡」

俺が立ち上がったことで寝ていた留美が起きてしまったようだ。留美の寝顔を見た限りは問題はなさそうではあったがやはり体調が気になる。

留美はまだ半分ほど目が閉じてうっとりとしていて可愛いと思ってしまったが心配は心配。

「起こしちゃったか、悪いな」

「ううん。…八幡何か温かいものが飲みたい」

そうやって素直に甘える留美、それがまたとても可愛らしく見える。きつとそれは風邪で弱っているせいだとは思いますが、守りたいと思わせる。とくに俺が留美にしてやれる

ことがあるとは思えないと思うが。

「スポーツドリンクはもういいのか？」

「たくさん飲んだからもういい」

「そうか」

うえ、と小さく舌を出す留美。確かに飲ませ過ぎた気もしないではない。まあ風邪をひいた留美が悪い。今後は風邪を引かないように。

「そうだな、じゃあホットミルクでも飲むか？俺は今からコーヒー淹れるけど」

「八幡と同じがいい」

留美はベットから起きだしてソファアに座る。ソファアに座ってベットから俺が小さい頃から使っているお気に入りの夏用の毛布に包まっている。

俺はいつもあれがないと眠れない。

とりあえず必要な道具を準備して豆を挽き始める。欠陥豆は既に取り除いてあるのですので挽き始めることができる。欠陥豆を取り除くのは面倒だがその間に聞いているラジオが面白い。ぼつちラジオとか最高。

「八幡、この毛布、いい匂いするね」

「ん？まあ小町が買ってきた柔軟剤とかじゃないか？」

留美は柔軟剤の香りが気に入ったのか毛布をすーはーすーはーしている。なんとな

く留美の目がとろんとしてゐる気がする。

…あの柔軟性なんかやばいやつでも入ってるんじゃないか…

そんなことを考えながら豆を挽き終えてペーパーに移し替える。それにお湯を落とす蒸らしながらその間にミルクを作る。ミルクを作るといつてもまあ単純には温めたミルクを泡立てただけ、ではあるがそれにもちよつとしたコツはある。

お店のエスプレッソマシンなら自分でする必要がないから楽でいい。マシンのミルクはスチームでミルクのなかで対流させてキメ細やかな泡を作っている。

やっぱり仕事をするのは機械である。もう人間いらなくね？

少し時間をかけて抽出したコーヒーからはいい香りが広がりそれだけでカフェインを摂取した気になる。

コーヒーを温めたカップの中に入れその上にミルクをのせる。

俺が勝手に思っているだけだが、フォームドミルクは一般的なペーパードリッップ式なよりもエスプレッソの方がやはりしっくりくる。

いつも自分で飲むときはミルクは泡立てないが今日は留美がいる。

ミルクに『るみ』と書いてコーヒーを完成させた。本当はうさぎだとかクマとかを書こうとも思ったのだが、俺は留美がなにを好きなのかわからない。まあイクエストも受け付けていなかったのだし仕方のないことだが、少しでも留美が笑ってくれたらいいな

と思う。

自分のコーヒーにもとりあえず『はちまん』と書いて留美の座るソファアールへと向かう。留美にコーヒーを差し出し自分も留美の隣に座る。それほど大きくはないソファアールだがなるべく留美と間隔をあけて座った。

留美はありがとうと言つて受け取りコーヒーを手に取る。しかしすぐに手を離しケータイを取り出した。

「八幡、撮つていい?」

「ああ、いいぞ」

やはり留美も女の子なのか嬉しそうに写真を撮る。

「八幡」

「なんだ?」

ニコニコしながらケータイを取めて留美は俺を呼んだ。

「どうせなら『???るみ』って描いて持つてきてたらよかったのに」

「…アホか」

微笑みながらそんな冗談を言う留美にドキツとしまい、照れを隠すために留美の頭をわしゃわしゃと撫でる。留美は「髪がく」と言いながらも楽しそうに笑う。

一通り留美の頭を撫で終えてコーヒーを飲む。苦味と甘みが口の中に広がり満たさ

れていく。

留美もカップを両手に持ち、飲み始めた。

ふわり、と幸せそうな顔をしている。相当ルミルミのお口にあつたらしい。

やはり誰かの為に淹れるコーヒーはいい。その顔を見るだけでそう思える。俺が奉仕部に入部していなければ思うことはなかっただろう。

「…八幡、ニヤニヤしないで。キモい」

「そんだけ言えればもう大丈夫そうだな」

「その顔キモい。そんな微笑ましそうに見ないで。キモい」

そんなに睨まないでくださいぞくぞくします。

…俺もだいたいぶやばいな。中3女子に睨まれてぞくぞくするとか異常だろ。今のこの状況を雪ノ下と由比ヶ浜に見られてどう言われるかは容易に想像できる。

「八幡…」

「なんだ？」

俺を呼んでから留美はコーヒーを飲み干した。

「なんでこのコーヒーはこんなに美味しいの…」

空っぽのカップを見つめる留美はとても空っぽに見える。

俺にはそれをどうやって埋めればいいのか、そもそも俺が埋めていいのかもわからな

いし埋めれるかもわからない。

「それはまああれだろ」

きつと俺にできることと言えば、留美のためにコーヒーを淹れることぐらいしかできないだろう。

「留美のために淹れたからな」

「…なにそれ」

留美は空つぽのカップを見つめて握りしめる。空つぽのカップにも、まだ仄かな暖かさが残っているのだろう。

「八幡…」

俺の名前を呼び、カップの底に残っているコーヒーで円を描いている。

カップを見つめる留美の顔はどこか思いつめているような、諦めているような。

「…どうしたら、いいのかな…」

あまりにも小さくて、今も降る雨の音に溶けてしまいそうな声。

ひとりで抱えて、ひとりで解決する、それは別に悪いことではない。俺や雪ノ下はそうやってきた。

「留美…」

けど、ひとりでやっているように見えて、案外誰かが知らず知らずのうちに支えてく

れていたりもする。

「お前はひとりではない」

俺の場合はあざとい妹だった。

「おまえじゃない、留美……」

少しだけ留美は笑った。

俺と留美とのお約束の会話。

困ったら相談しろよ、とかそんなことは軽々しく言わないし言えない。

けれどももし、留美が俺に手を伸ばして助けてと願うなら、その時はしっかりと握ってやりたいと思う。

「……そろそろ帰ろうかな」

握っていたカップを優しく置いた。

今話さないと言うなら、きつと彼女はまだ大丈夫だ。

「じゃあ送るわ。病み上がりで倒れられても困るし」

うん、と留美は素直に小さく頷いた。

それからの道すがら、俺と留美はほとんど話さなかった。まあ俺に面白い話をしろというのはもちろん無理だし、留美との沈黙はわりかし気にならなかった。というかむしろ居心地が良いとさえ思えた。それは留美も同じように感じていたのかもしれない。



「八幡、もうここで大丈夫」

「そうか」

そうして背を向けて歩き出す留美。

ふと思いついたように留美は振り向いた。

「八幡」

「なんだ？」

「おまえはひとりではない、って八幡のくせにかっこつけすぎ。…けど、ありがと」

それだけ言うのと留美は歩き出してそして見えなくなつた。

「まあ確かに、そうかもな」

頭を掻きながらきた道を歩く。

雪ノ下ならなにかしら言つて罵倒してきそうだし、由比ヶ浜はヒツキーのくせにキモいとか言いそうだ。一色に至つては口説いてるんですかごめんさないって言つて振られそうだ。

けどまあ、留美の笑顔が見れたからいいだろ。可愛かつたし。

そして唐突に思い出した。

「雨、そういえば降つてないな…」

すげーどうでもいい。